

編集後記

科学研究費補助金基盤研究 (S)「エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究」研究報告集第1号を刊行します。この科学研究費による基盤研究 (S) (研究代表者: 吉村作治) は2007年度から開始されたもので、北はアブ・ロアシュから南はダハシュールまで、エジプト北部の中心拠点であるメンフィスの墓域が形成された広大な地域を対象とするものです。紀元前3000年頃にエジプトが1人の王のもとで統一され、第1王朝が樹立された際に、メンフィスは統一王国の都として建設され、その後も、古王国時代を通じた中心拠点として存在していました。一般に、中王国時代や新王国時代を扱う際には、南のテーベが中心拠点として注目されますが、北のメンフィスもまた、古代エジプト王国の長い歴史を通じて、テーベに対応するもう一方の拠点として展開していきました。

これまで早稲田大学古代エジプト調査隊は、カイロ近郊に位置するメンフィス・ネクロポリスにおいて探査や発掘調査を重ねて来ました。特に、1991年から始まったアブ・シール南丘陵遺跡の調査においては、新王国時代第18・19王朝の遺構を発見し、さらに、ダハシュール北遺跡においては、中王国時代と新王国時代という2つの時代に中心を持つ広大な墓域の調査を1995年から継続して実施しています。また、3大ピラミッドのあるギザ台地においても、1980年代より調査を継続しております。このように、メンフィス・ネクロポリスは、初期王朝時代から古王国時代の間だけではなく、プトレマイオス朝時代・ローマ支配時代に至るまで、古代エジプト王国において非常に重要な位置を占めていました。こうしたことから、このメンフィス・ネクロポリスにおける文化財の保存や遺跡整備計画を研究し策定することは極めて意義のあるものであると言えます。

また、当該地域は、エジプト・アラブ共和国の首都で、多くの人口が密集するカイロ市とも距離的に近く、急速な人口増加にともなう都市化や開発の問題と密接な関わりを持つ地域であり、また、世界遺産「メンフィスとそのネクロポリス—ギザからダハシュールにかけてのピラミッド地帯 (Memphis and its Necropolis-The Pyramid Fields from Giza to Dahshur)」に登録されていることから多くの観光客が訪れる場所となっています。このような開発や観光の問題などの影響は大きく、遺跡の整備計画を策定することが急務となっています。そのため、様々な分野に関する現状の把握と、その上に立脚した対策を早急に構築していくことが不可欠となっています。

この研究報告集第1号においては、上記のような認識のもとで、遺跡の重要性と保存管理の現状、先端的科学・技術による保存研究、地質・地盤学的研究、遺物の管理・保存修復、観光学的研究といった多岐にわたる研究の概要と成果を掲載しています。こうした多方面からの問題点の指摘と多くの研究の積み重ねによって、より良い遺跡整備計画を作り上げることができると確信しています。

最後になりましたが、本報告書をまとめるにあたっては、早稲田大学理工学術院客員准教授の河合 望氏に非常にお世話になりました。ここに明記して感謝したいと思います。エジプトにおける民主化運動の動きとともに、エジプトにおける古代の遺跡の保存・修復・管理に対しても、新たな時代が到来するように努力していきたいと思えます。

早稲田大学文学学術院教授

近藤 二郎